小－39

脊椎狭窄症に対して背側椎弓切除とチタン製インプラントによる脊椎固定を実施した犬の１例

○村上祥子[1)]　越後良介[1)]　華園　究[1)]　奥村正裕[2)]
１）北大附属動物病院　２）北大獣医外科学

【はじめに】犬の先天性脊椎狭窄症は、出生時の脊椎の異常に起因する脊柱管や椎間孔の狭窄を示す。その狭窄が重度の場合は、脊髄圧迫により歩行困難などの神経症状を引き起こす。本症に対する確立された治療法はないが、一般に脊髄圧迫を伴う脊椎奇形に対しては外科的減圧術が選択され、必要に応じて脊椎固定が併用される。脊髄の評価にはMRIが適しているが、脊椎固定にステンレス製インプラントを用いるとアーティファクトが発生するため、術後の評価が困難となる。今回、複数の脊椎異常を併発した脊椎狭窄症に罹患した犬に対し、背側椎弓切除術およびチタン製インプラントを用いて脊椎固定を実施したところ、臨床兆候の改善を認め、MRIによる経過観察が可能であったのでその概要を報告する。

【症例】ヨークシャー・テリア、避妊メス、３歳齢、体重800 g。半年前からの活動性低下、２週間前からの起立困難を主訴に本学を紹介受診した。初診時、後肢の姿勢反応の消失と立ち直り反応の低下～消失を認めた。MRIおよびCT検査にて頭部頸椎接合部奇形、頭側胸椎を中心とした椎間関節形成不全、椎弓奇形、重度弯曲および脊椎狭窄症を認め、T4～7の椎弓板の低形成および腹尾方向へ変形した棘突起の脊柱管内侵入が脊髄圧迫の主因と判断された。脊髄圧迫部位に対して背側椎弓切除術を実施し、併せてチタン製インプラントと骨セメントを用いたT5～7の脊椎固定を行った。術後合併症としてピンの挿入と関連した気胸を発症したが、術後４日以内に穿刺脱気せずに自然治癒した。術後６日から後肢の姿勢反応が出現し、術後40日には四肢を使用した歩行が可能となった。術後12カ月の検診にてMRI所見上脊髄圧迫は残っているが、十分な歩行が可能であり経過は良好である。

【考察】先天性脊椎狭窄症の治療に関わる報告は少ないが、重度の脊髄圧迫を伴う場合には外科的減圧術が治療選択肢になると考えられる。本症例は棘突起の奇形により脊椎狭窄症が発生していたため、背側椎弓切除術を適用し、臨床徴候の改善が得られた。本症例の脊椎狭窄症は脊髄空洞症を含む複数の脊椎・脊髄の異常を合併しており、MRIによって脊髄の状態を把握することが必要である。本症例ではチタン製インプラントを選択したことでMRIによる脊髄の継続的な評価が可能であった。今後も合併する脊椎・脊髄の異常の経過と併せて本症の治療経過を観察していく予定である。